
三和さんが繋いだ人とひと —かけがえのないもの、人間の尊厳といのちの大切さ—

731部隊・細菌戦資料センター共同代表
岐阜環境医学研究所所長 **松井英介**



重慶大空襲の被害者が、昨 2019 年 11 月
東京に来られたので、会いに出かけました。

彼らは、最高齢 87 歳平均年齢 80 歳代の
男女 9 人でした。

重慶大空襲は、日本の軍隊（皇軍）が 1938
年から 5 年半にわたって行った空から戦争
です。皇軍はそれが国際人道法で禁止され
ている大量無差別殺戮であることを承知の
上で強行したのです。

1937 年皇軍は中華民国の首都南京を占領
しました。この時皇軍が行った非人道的な
南京大虐殺は国際的に広く知られています。
蒋介石の国民党政府は、首都を内陸四川省
重慶に移しました。

重慶を深い山と川に囲まれた天然の要塞
だと評価した皇軍は、軍需施設も巨大工場
もない平和なこの地に、途中からゼロ戦も
投入して、空からの大量無差別殺戮をし
かけたのです。

四川省は豊かな穀倉地帯でしたから、人
びとの糧道を断つ目的もありました。

2019 年 11 月 10 日と 11 日、久しぶりに
会った原告のみなさんは、元気いっぱい
でした。

今回の訪日には、二つの目的がありま
した。

ひとつは、日本の最高裁に彼らの被害を
公正に評価させ、謝罪と賠償をさせるこ
とです。私も同行しましたが、最高裁を代
表して対応した小寺担当官との会見時間
はわずか 30 分。

はるばる来日した原告のうち 4 人が、自
らの被害の実際と踏みにじられた尊厳の
回復を大急ぎで訴えるのが精いっぱい
でした。

重慶裁判の詳細は、「重慶大爆撃対日民間
賠償請求訴訟」の下記 website をご参照
く

ださい。

<http://www.anti-bombing.net/index.html>

重慶大空襲被害者訪日のもう一つの目的
は、「小田三和さんを偲ぶ会」に出席する
ことでした。重慶大空襲被害者にとって、
三和さんは、自らの闘いを支え続けた、
最も大切な日本人のひとりでした。

三和さんは、去る 2019 年 8 月 26 日、
70 年の生涯を閉じました。彼女のいのち
を奪った直接の死因は乳がんでした。

三和さんは母の実家・福岡県若松に生
まれ、幼少時は広島で育ちました。幼い
ときに、村の橋の架け替え工事現場の事
故で父を失いました。母は、父の農業を
手伝っていましたが、父の死の翌年から、
戦時中の看護婦の経験を生かして、養護
教員の仕事に就きました。

三和さんは、広島大学在学中から国家
権力の非人間的なやり方と闘い、その
後は、弁護士事務所の一員として働
いてきました。

本来ひとのいのちを守るべき医師たちが、
ペスト菌など細菌を無差別殺人の兵器
（生物兵器）として開発・使用した 731
部隊。

731 部隊や 1644 部隊など皇軍の医師
たちの組織的な犯罪の被害者である
浙江省など中国の庶民 180 名が原告
として、立ち上がり、日本政府を相手
取って裁判を起しました。

1997 年 8 月のことです。土屋公献
弁護士団長を中心に日本全国各地の
弁護士二百数十名がこの裁判を支
えました。

「小田三和さんを偲ぶ会」が開かれた
東京文京区シビックセンターの屋上
に近い大きな会場は、中国の人びと
と全国各地から

やってきた日本人でいっぱいでした。

闘いの中心にいて、いつも顔を合わせていた弁護士である西村正治さんと鬼東忠則さんと何年ぶりに顔を合わせ、握手を交わしました。両弁護士との再会はとてもうれしく、三和さんが、ともに闘った仲間を繋いだのだと思いました。

松村高夫さんそして近藤昭二さんとは、懇親会ですぐ近くに座ったこともあって、いっぱい話ぐできました。三和さんを偲ぶ場でなければ聞けないような、敬一郎さんの個人的な人間模様話話も交え、話に花が咲きました。

お互いの心に触れ、ともに闘う親しい仲間だと感じられたことが、何よりうれしいことでした。

王選さん、菅建強さん、弁護士の田代博之さん、西里扶甬子さん、前田哲男さん、三角忠さん、和田千代子さん、奈須重雄さん、五井信治さん、元永修二さんたちとも、久しぶりに会うことができました。

参加者の発言の中では、731 細菌戦訴訟をとともに闘ってきた国際法学者・華東政法大学の菅建強さんの次のような発言がとくに印象に残りました。

「日本政府はアジア諸国に対する日本の植民地支配と侵略に反省の意を表明しているが、国際法および国際慣例に基づけば、それらは正式な謝罪とは見なされない」。

「1972 年の日中共同声明で、中国側は戦争賠償請求権を放棄したが、被害者である中国人民の利益（謝罪と賠償）は放棄できない」。「アメリカ合衆国による原子爆弾投下は、国際人道法に違反しており、日米両国政府に責任がある」。

三和さんは、731 部隊・細菌戦訴訟と重慶訴訟の事務局を担った一瀬法律事務所にあつて、裁判闘争の裏方として献身的に働いてこられました。そのご苦勞は、「偲ぶ会」の参加者が口々に話されましたが、並大抵のものではありませんでした。

裁判の詳細は、「NPO 法人731 部隊・細菌戦資料センター」の下記 website をご参照ください。

<http://www.anti731saikinsen.net/index.html>

私自身 1995 年以来、731 部隊（ハルビン郊外の平房）・1855 部隊（北京）・1644 部隊（南京）跡を訪ねました。また、弁護団の方々とともに、浙江省の崇山村をはじめ湖南省の常德市など被害現地への調査と被害者の方々との交流に、何回も同行しました。現地では、三和さんとよくご一緒しました。

三和さんと最後にお会いしたのは、2019 年 3 月 28 日でした。

この日私たちは、衆議院第二および第一議員会館で、スイス・バーゼル州立研究所からマルクス・ツェーリンガーさんをお迎えして、講演と交流の集いを開催しました。

『はは測定所開設』マルクス・ツェーリンガー博士来日記念講演 in 東京『乳歯のストロンチウム-90 を測る』人工放射性物質から子どもたちのいのちと尊厳を守るために」です。

詳細は、「乳歯保存ネットワーク『非営利未来型株式会社はは』」の下記 website をご参照ください。

<https://hahainc.jp/>

この日、三和さんは、忙しい時間を割いて、衆議院第一議員会館まで、駆けつけてくださいました。議員会館に近い大きな交差点で彼女と別れたのですが、三和さんは、私たちの姿が見えなくなるまで、ずっと手を振りつづけておられました。

彼女は多くを語りませんでした。

しかし、彼女は、2011 年 3 月 11 日にひき起こされ、今もその甚大な被害が未解決のまま続いている、人類史上最大最悪の原発大惨事、「東電福島第一原発大惨事」に、胸を痛めておられたに違いありません。

私は、そのとき、その瞬間が彼女との永久の別れになることに、まったく気づかなかったのですが、彼女は自分を襲った病が進行性で、長くは生きられないことを感じておられたのにちがいないと、今にして思うのです。

私は、かけがえのない人を失ったとの想いを日々強くしています。

(了)